平城京左京三条一坊一坪の発掘調査（平城第 491 次調査）記者発表資料

2012 年 6 月 21 日
独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所　都城発掘調査部

調査地　：奈良市二条大路南三丁目
調査主体：奈良文化財研究所　都城発掘調査部
調査面積：1872 ㎡（東西 48m×南北 39m）
調査期間：2012 年 4 月 2 日～（現在継続中）

※現地説明会のお知らせ
2012 年 6 月 23 日(土)　13:30～　　小雨決行

1．平城京左京三条一坊一坪に関するこれまでの調査

本調査の調査地である平城京左京三条一坊一坪は平城宮の正門である朱雀門のすぐ南東に位置し、現在は史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園の一部となっている。奈良市教育委員会や奈良文化財研究所による周辺の調査成果によれば、この坪は朱雀大路に面する西面と二条大路に面する北面には築地塀などの遮蔽施設をもたないとみられ、朱雀門前の広場的な土地であった可能性が高いとされる。また奈良市教育委員会の調査により、坪を南北に二分する東西方向の坪内道路の存在が確認されている。

調査地位置図（★印が調査地）

この地に国土交通省による平城宮跡展示館（仮称）建設の計画があり、2010 年度から奈良文化財研究所が発掘調査をおこなっている（平城第 478・486・488 次調査）。第 478 次調査では、井戸屋形を伴う上段正方形、下段六角形の大型井戸を検出し、井戸の中からは木簡や木製品・金属製品・

土器・瓦などさまざまな遺物が出土した。第 486 次調査では、平城宮造営に伴うとみられる鉄鍛冶工房群が広がることを確認している。第 488 次調査では、坪内道路やそれに先行する建物群を検出し、特に３棟の南北棟建物についてはさらに南へ展開する可能性が考えられていた。

本調査は、第 488 次調査で検出した建物群の規模や配置の確認、および坪全体の土地利用のあり方の解明などを主目的として、４月２日より開始した。

２．検出した遺構

本調査区内では、平坦面を形成するため広く整地を施している。削平により整地土下の地山が露出している部分もあるが、遺構はすべてこの整地土上ないし地山面上で検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物４棟（建物１・２・４・６）および土坑１基、溝３条などである。なお、建物番号は第 488 次調査からの通し番号とし、本調査区に展開しない建物３・５については説明を割愛する。

建物１　調査区西北部で検出した桁行10 間、梁行２間の南北棟掘立柱建物で、東面の南６間分にのみ廂がつく。西面は調査区外のため廂の有無等は不明。第 488 次調査で桁行８間分を検出していたが、本調査でさらに南２間分を検出し、桁行が 10 間であることを確認した。２箇所に間仕切があり、桁行方向を４間、２間、４間に分割する。柱間寸法は桁行、梁行ともに約３m（10 尺）等間、廂の出は約 2.4m（８尺）。

建物２　調査区北部中央で検出した桁行６間、梁行３間の南北棟掘立柱建物。すべての柱筋に柱を有する総柱建物である。第 488 次調査で桁行４間分を検出していたが、本調査でさらに南２間分を検出し、桁行が６間であることを確認した。柱間寸法は桁行が約３m（10 尺）等間、梁行が約 2.4m（８尺）等間。

建物４　調査区北部東寄りで検出した桁行６間、梁行１間の南北棟掘立柱建物。第 488 次調査で桁行４間分を検出していたが、本調査でさらに南２間分を検出し、桁行が６間であることを確認した。柱間寸法は桁行、梁行ともに約３m（10 尺）等間。南北の柱筋がそれぞれ建物２の南北の柱筋と揃う。

建物６　調査区東南部で検出した桁行４間、梁行２間の東西棟掘立柱建物で、北面に廂がつく。南面は調査区外のため廂の有無等は不明。柱間寸法は桁行が約 2.7m（９尺）等間、梁行が約 2.4m（８尺）等間、廂の出は約 2.4m（８尺）。建物１・２・４や南北溝との先後関係は不明。

土坑　調査区南部西寄りで検出した土坑。東西約 1.2m、南北約 1.5m の隅丸方形を呈し、深さは約 50cm。埋土に少量の瓦片を含む。

東西溝１　調査区南部やや西寄りで検出した東西方向の素掘溝。長さ約 10m 分を検出した。最大幅約 1.2m、深さ約 15cm。埋土から奈良時代後半の軒丸瓦などが出土した。

東西溝２　調査区南部中央で検出した東西方向の素掘溝。長さ約５ｍ分を検出した。幅約0.4～0.8ｍ、深さ約７㎝。

南北溝　調査区中央やや東寄りで検出した南北方向の素掘溝。長さ約 22m分を検出した。幅約0.6～1.4ｍ、深さ約 10㎝。埋土から奈良時代半ば頃の軒丸瓦や奈良時代の土器などが出土した。建物６との先後関係は不明。

３．出土遺物

本調査における主な出土遺物は奈良時代の土器・陶硯・軒瓦であり、その他に埴輪片や鉄滓なども出土している。

４．まとめ

現時点における主な調査成果は、次のとおりである。

①建物１・２・４の規模を確認

第 488 次調査で検出した建物１・２・４の南端を確認した。３棟とも第 488 次調査区南端からさらに南へ２間分つづき、桁行は建物１が10間、建物２・４が６間となった。

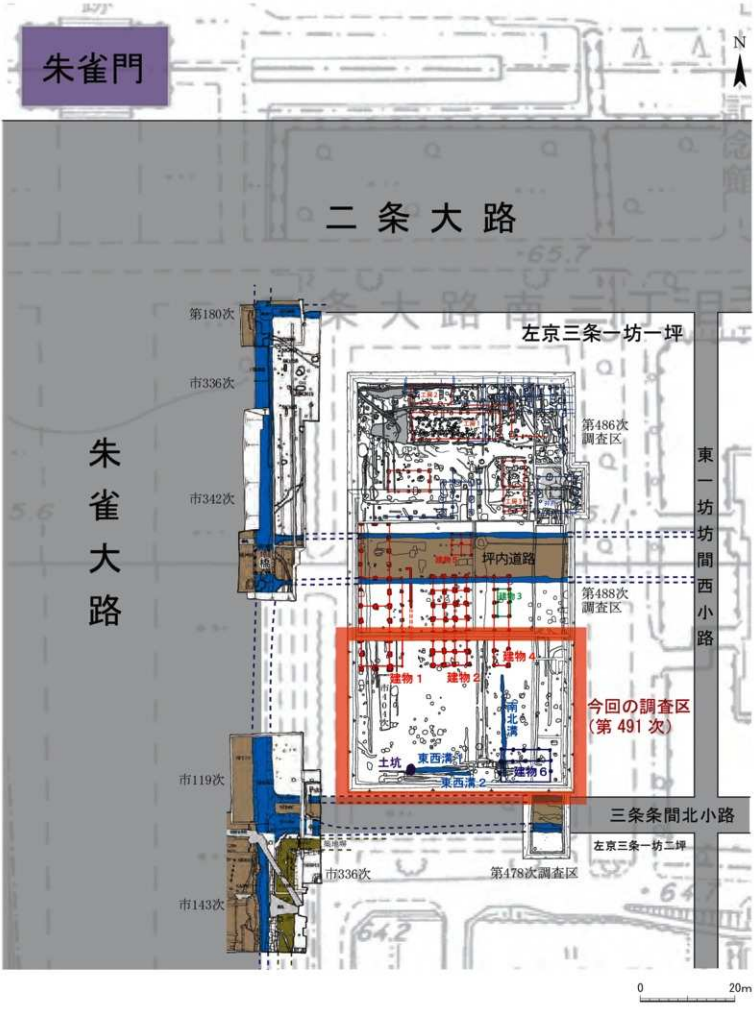
この結果、特に建物１・２は平城京内としては大規模な建物であることが明らかとなった。建物１は桁行が約 30mにおよぶ長大なものであり、２箇所の間仕切で４間、２間、４間に分割する構造も特徴的である。また総柱建物の建物２は高床の倉庫である可能性があり、その場合、床面積が約 130 ㎡におよぶ大規模なものとなる。

②建物群の計画的な配置を確認

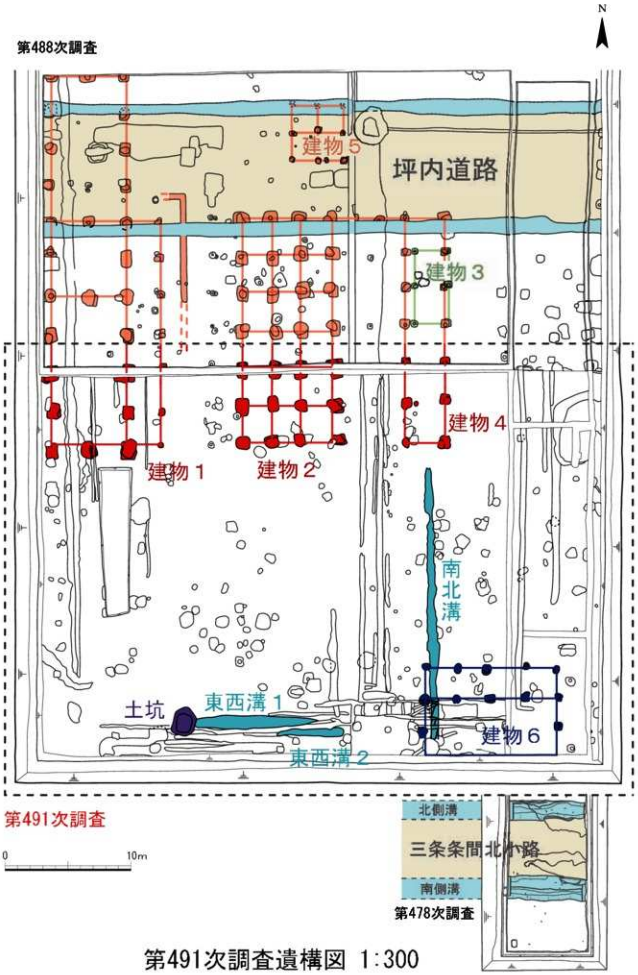
建物２・４の南端を確認した結果、両者が南北両端で柱筋を揃えて建設されていることが判明した。また建物１の南の柱筋についても、建物２・４のそれとほぼ揃うことを断割調査により確認した。これらから、３棟の建物が同時期に、一連の計画のもとに建設された様子がうかがえる。

なお、建物１・２・４の南の柱筋は左京三条一坊一坪の南限となる三条条間北小路の北側溝の中心より約 30m（100 尺）の地点に位置している。このことから、これら建物群の配置に際して条坊設定が基準となった可能性が考えられる。

本調査により、左京三条一坊一坪では坪内道路の敷設以前に大規模な建物群が計画的に建設されていたことが判明し、またそれらの廃絶後は構造物の少ない広場のような様相を呈していたことを確認した。これらは、平城京内における土地利用のあり方とその変遷、左京三条一坊一坪の性格等を考えるための貴重な成果と言える。なお、今回検出した建物群の建設時期や存続期間等については、今後も調査・研究を継続していく予定である。



第491次調査位置図　1:800



第491次調査遺構図 1:300